

2018年度日本ピューリタニズム学会関西研究会

日 時：10月28日（日）15:00～17:00

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

（京都市下京区祭西洞院通塩小路町939）

京都市営地下鉄烏丸線、JR各線「京都駅」下車、徒歩5分

報告者：中野泰治（同志社大学）

「ジョージ・ホワイトヘッドの正統派神学について——静寂主義の原因を巡って——」

司 会：岩井淳（静岡大学）、コメント：

懇親会：17:30～

要旨：クエーカーの第一世代に当たるジョージ・ホワイトヘッド（George Whitehead, 1636?-1723年）は、若くして熱心な宣教者となり、同世代のフォックスやフェルなどの他の指導者が死去した後は、フレンド派の主要な指導者となって、18世紀前半までクエーカー信仰の擁護と維持のために努めた。彼の思想は、（時代状況に応じて漸進的な変化を伴うものであるが）、大まかに言って、1650年代から名誉革命までの「前期思想」と、寛容令（1689年）の出された名誉革命後の「後期思想」に分けられる。前期思想は、「内なる光の働きに従うことが救い至るための条件である」ことを繰り返し述べるもので、その意味で「疑似アルミニウス主義的」な思想である。名誉革命後は、(1) 他宗派との論争の結果、(2) フレンド派が寛容令の対象となるために、そして、(3) 派の信仰の独自性を守りつつ、かつ社会的な評価を高めるために、彼の信仰は、正統派神学に接近し、規律を重んじるものとなった。ここでいう「正統派神学」というのは、墮落の教理や自己否定の強調、聖書の教えの重視、そして、スポーツや観劇などのこの世的なものを避け、愛において一致を保つように説き勧めるピューリタンの心性を伴ったものであった。